

雑談集における希望表現について

柴田 昭二
連 仲 友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿⁽¹⁾を受け、雑談集を研究資料として、それにおける希望表現⁽²⁾の実態を説明しようとするものである。

『日本古典文学大事典』⁽³⁾などによると、雑談集は鎌倉中期の仏教説話集。著者は沙石集と同一の無住道暁。沙石集執筆後、嘉元三(一二〇五)年成立。その内容は書名の「雑談」(著者が謙遜の気持ちを含めて)で示されるように、沙石集に比して全体の組織に統一性が乏しく、聞くまま思うままに記述したように思われる。説話の取材範囲は広く天竺・震旦・日本に亘り、仏典中の因縁譚や比喻譚、庶民間の滑稽譚、無住自身の見聞と体験を含め、また和歌も七〇余首採用される。各巻の編集意図を整然と現し、仏教の要旨や処世訓などを説く啓蒙書という性格の沙石

集と異なり、本書は無住自身の生い立ち、求法などについての告白・述懐を述べるのが特徴であると思われる。その文章は沙石集に比べ、平易な表現と記述が感じられる。その文体の基本は漢字片仮名交じり文であるが、また和歌と漢文体のものも含まれる。

テキストには、山田昭全・三木紀人校注『雑談集』(三弥井書店刊「中世の文学」第一期第三回配本 平成一二年三月第四刷発行)を用いる。その底本は、寛永二十一年版を底本としているが、翻刻に際して、底本にある振り仮名は片仮名のまま(あまりにも自明なものは削除した)、校注者のつけたものは平仮名で示され、仮名に漢字をあてた場合はもとの仮名を()で傍記したとする。

また、香川大学図書館の神原文庫に

雑談集 一〇巻 沙門無住(梶原一円)寛永二刊(堤六左衛門)五冊
分類番号 一八〇・四

(神原文庫分類目録 風間書房 昭和三十九年三月)
が揃っており、テキストを補助するものとして、希望表現で削除された振り仮名を()で補った。

二、希望表現の構成形式

雑談集（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれの用例数は以下の通りである。

| | |
|----------|--------|
| 「欲」 | (二四例) |
| 「ソントオモフ」 | (二四例) |
| 「ソントス」 | (一六例) |
| 「願」 | (一〇四例) |
| 「願ス」 | (一例) |
| 「願フ」 | (一八例) |
| 「ネガハクハ」 | (四例) |
| 「ネガハシ」 | (二例) |
| 「庶幾」 | (三例) |
| 「欣」 | (九例) |
| 「望」 | (一三例) |
| 「祈」 | (二七例) |
| 「乞」 | (二〇例) |
| 「請」 | (五例) |
| 「求」 | (二四例) |
| 「詭」 | (二例) |
| 「ホシ」 | (六例) |
| 「タシ」 | (二四例) |
| 「バヤ」 | (三例) |
| 「テシガナ」 | (一例) |

右から見られるように、本書における希望表現を成す構成形式の種類が多く見られる。その主要な構成形式の用例数から見て、仏教用語とし

ての名詞「願」の用例数が特に多いこと、助動詞「マホシ」が見られず「タシ」が多用されていることを指摘したい。その理由としては、本書の内容は仏教関係のものである故に、仏教用語としての「願」が多用されることが当然である。また、「マホシ」が見られず「タシ」に取って代わられたことに著者の意識があると考えられよう。

三、各形式の用法

1、「欲」「ソントオモフ」「ソントス」の用法

まず、「欲」の用法を見る。本書に「欲」は二四例あり、そのうち名詞用法が二〇例、実動詞用法が一例、助動詞用法が三例見られる。

(1) 中比ニ京中ニ、身ハ豊ニシテ貪欲無極、知恵才覚無テ、然モ又音声ワルク、口モキカズシテアル説法者一人候キ。

(卷第四 一三七頁)

(2) 神明我国ニ跡ヲタレ、大聖ノ方便ニ明王・賢主ト生レテ、欲釣モテ、仏道ニ入シメ給事、大権ノ慈悲、カタジケナクコソ侍レ。

(卷第十 三〇九頁)

例(1)(2)における「貪欲」「欲」はいずれも「欲望」を表す名詞用法である。

(3) 佛法ヲ學シ行ゼヨト勸ルヲ不_レ用事、譬バ不食ノ物ニ食ヲ勸ルニ都テ不_レ食。不_レ欲ガ如シ。

(卷第三 一〇七頁)

例(3)は「食べたくないようだ。」の意と解され、実動詞用法である。

(4) 古人ノ云ク、「欲^{ホツセ}学^{ハツ}道^{ミナ}、可^レ学^シ貧^{マナブ}」。

(巻第一 四七頁)

(5) 「有身ト者身見也。身見ハ計^{ケス}我^{ガガ}、欲^{ホツシ}令^テ得^{ラク}樂^ヲ、能^{ヨク}行^ズ善^{セン}故^{ナリ}」。

(巻第九 二八二頁)

(6) 願^ハ我^ム臨^ル、欲^{ホツ}命^{ミコト}終^{ハツ}時^ニ等^ニ願^ハ、弥陀極樂ヲ願ヒ給ヘリ。

(巻第六 一九八頁)

例(4) (5)は漢文における助動詞用法の例である。「もし道を学びたいと思うならば」、「樂を得させたいと思って」、「の意と解され、いずれも希望表現の下位分類では「願望」を「説明」する用法である。例(6)は、「私の命が終わろうとする時に」、「の意と解され、希望表現ではなく「将然」を表す用法である。

次に、「ソントオモフ」の用法を見る。本書に希望表現と認められる「ソントオモフ」は二四例見られる。

(7) 后^キ臣^コ下^コノ纒^エヲ取^テ落^シテ王^ニ此^ノ事^ヲ語^テ臣^下ヲ誅^セシメント思^フ。

(巻第一 六五頁)

(8) 「彼ノ恩ヲ報ゼント思フ。絹十疋アリ、進^シ之^ヲ、我志ヲ申^ノヨト」。

(巻第五 一八六頁)

例(7) (8)は文末の言い切りの形である。例(7)は地の文で「臣下を殺させたいと思う。」の意と解され、第三者の「願望」を「説明」する用法である。例(8)は会話文で「助けられたご恩に報いたいと思う。」の意と解され、一人称の「願望」を「表出」する用法である。

(9) 女房イハムト思フケシキナガラ、イラエモセネバ、経ヨミハテ、ト、

(巻第四 一四〇頁)

(10) 本来智者ヲ教導セント思^フ心ナシ。

(巻第十 三二四頁)

例(9) (10)は連体修飾の形である。「ものを言いたいようすが」、「智者を教導したいと思う心は」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(11) 「道ヲ學セント思ハバ、貧ヲ學セヨ」ト云ヘリ。

(巻第三 一一五頁)

(12) セメテノ悲サニ、今一度見^{ヒト}ント思^ヒテ、ヒソカニ棺ヲアケテミレバ、

(巻第四 一四四頁)

例(11) (12)は従属節の形である。例(11)は先出の例(4)の漢文体を口語体にしたものであり、「道を学びたいと思うならば」の意、例(12)は「もう一度見たいと思って」、「の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

次に、「ソントス」の用法を見る。周知のように、「ソントス」の基本的な用法は「将然」を表すのであるが、そのうち「有情物」の「将然」は希望表現と関連性がある。本書に希望表現と関連する「ソントス」は一六例見られる。

(13) 出家シ寺ニ住ス。住處・衣食心ニ不^エ叶^キ。是ニ不^シ堪^エ還^ゲ俗セムトス。

(巻第三 一〇〇頁)

(14) 空門ヲ修セムトスレバ、即意ノ馬アレテ、六塵ノ境ニハス。
スナチコ、ロ

(巻第四 一四七頁)

例(13) (14)は、「これに耐えられなくて還俗しようとする。」「空門を修行しようとする」との意と解され、いずれも希望表現と関連性があるものである。

2、「願」「願ス」「願フ」「ネガハクハ」「ネガハシ」「庶幾」の用法

まず、名詞「願」の用法を見る。本書に名詞「願」は一〇四例見られ、すべて仏教に関係する用語である。

(15) 又薬師ニ有^リニ^二十二ノ願^ヲ。
ヤクシ

(巻第六 一九七頁)

(16) 此中ニ天然トシテ衆生ヲ利スベキ本誓悲願^{ヒツ}有リ。
ヒツ

(巻第九 二六四頁)

例(15) (16)における「十二ノ願」「悲願」は仏教用語である。それ以外に、「四弘誓願」「五大願」「摠願」「別願」「虚願」「福願」「惡願」「呪願」「願心」「願行」などが見られるが、その用法は例(15)(16)と同様である。即ち、そのいずれもが仏教に関係する内容を指す名詞用法である

次に、「願ス」の用法を見る。本書に「願ス」は一例見られる。

(17) 咒願ニ云、「沐^{モク}浴身^{ヨクミ}牀^マ、當^ニ願^ス衆生身心無^ク垢、内外清淨ナラン」。

(巻第五 一七八頁)

例(17)は漢文体であり、「まさに願すべき」と訓読されるが、この「願

ス」は実動詞用法である。

次に、「願フ」の用法を見る。本書に「願フ」が一八例あり、そのうち連用形名詞法が一例、実動詞用法が一七例見られる。

(18) 大般若^{ハニニヤ}二、般若ノ徳^{トク}ヲ説^{トイ}テ、一切災難^{サイナン}病患^{ビョウオン}壽命^{ジュミヤウ}ネカヒノ如クナルベシト云テ、
ハニニヤ

(巻第六 二〇二頁)

例(18)は「願いの通りになるだろう。」の意と解され「ネガフ」の動詞連用形名詞用法である。仏教用語としての名詞「願」は仏教特定の希望内容を表すのに対して、この動詞連用形名詞用法「ネガヒ」の対象はより広く、一般的な希望を表す。

(19) サレバ談議^{ツイギ}ノ次^ノ如^キ此^ノ雑談^{ザツタン}ナド見テ、心ヲコリ、底ヨリ思ヨリテ、三學^{サンガク}齊修^{サイシュ}セム事ヲ願フ。
ツイギ

(巻第三 一〇九頁)

(20) コノ世ニ物思^{モノシ}人ノ、往生^{オウジヤウ}ヲ願フ事ニテ侍ラバ、イカニ心カシコカラムトナリ。
オウジヤウ

(巻第四 一四一頁)

(21) 譬^{タト}ヘバ稲^{イネ}ヲネカヒテ、エツレバ、藥^{クサ}ヲノヅカラ有リ。
イネ

(巻第九 二八三頁)

例(19) (20) (21)は「悟りを開くための三学を全て修めることを願う。」「浄土に生まれることを願うこと」「稲を手に入れたく思つて、」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

次に、「ネガハクハ」の用法を見る。本書に「ネガハクハ」が四例見られる。

(22)「願我^レ臨終ノ時盡除^ニ諸ノ障碍^一、面見^ニ弥陀佛^一、往生^ニ安樂國^一」
(卷第六 一九八頁)

(23)「願得^ニ智恵風^一」吹入^ニ法性海^一文
(卷第四 一四三頁)

例(22)(23)は漢文における用例である。「私が臨終の時に全ての障碍を除くように。」「知恵の風を得て法性の海に吹き入りたい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

(24)「願共衆生躰解道 発無上道歸眞際」
(卷第五 一七五頁)

例(24)も漢文における用例である。神原文庫本には「グワン」と読まれるが、漢文語法における副詞用法であり、「衆生と共に仏道に入るように」の意と訓読でき、例(22)(23)と同じ「願望」を「表出」する用法である。

次に、「ネガハシ」の用法を見る。本書に「ネガハシ」は二例見られる。

(25)心モト^ニマラザルマ、ニ、穢土^{エド}ノ愛執情^{ジャウ}ツキハテ、^{ジャウド}淨土ノ欣求^{ゴングイヨ}弥^ニ心^ニ願^{ネカ}ハシカルベシ。
(卷第四 一三三頁)

(26)智恵ハ葉、ネガハシク侍ル心也。
(卷第九 二六八頁)

例(25)(26)は「淨土欣求の心がますます望ましくなるだろう。」「そうありたい心である。」の意と解され、「希求」⁽⁷⁾を「説明」する用法である。

次に、「庶幾」の用法見る。本書に「庶幾」は三例見られる。

(27)永嘉大師・智覚禪師戒行、殆超^{ホシド}尋常ノ律僧^ニ、所^ニ庶幾^一也。
(卷第一 六〇頁)

(28)一念相応尤トモ可^シ庶幾^一ス。
(卷第一 七五頁)

(29)心アラム人、愚老ガ心ヲ知テ、如説行學所^ニ庶幾^一也。
(卷第三 一〇九頁)

例(27)は「コイネガフ」と訓読、例(28)は「庶幾ス」と音読、例(29)は「ソキスル」「コイネガフ」の両方の読みが記されているが、いずれにしても「希望する」の意であり、いずれも実動詞用法である。

3、「欣」「望」「祈」「乞」「請」「求」「詭」の用法

まず、「欣」の用法を見る。本書に「欣」は九例あり、そのうち実動詞用法が四例、名詞用法が五例見られる。

(30)又起^シ信論^ニ、「大乘ノ信解アリトモ墮^{ダシ}惡趣^ニ、不^ル遇^レ佛事^ヲ怖^フレバ、可^レ欣^ニ淨土^一」トテ、
(卷第八 二五一頁)

(31)後世菩提ノ心ニテ行^{ズレバ}善、世間ノ樂ハ不^{ザレバ}欣^ドモ、自然^ニ有^リ之。
(卷第九 二八二頁)

例(30)(31)は「淨土に生まれることを願いなさい。」「世間の樂を願わなくても、」の意と解され、実動詞用法である。

(32)欣慕^{ゴシボ}ノ心ヲス、メ、愛樂^{アイラク}ノ志シ深クシテ、習ヌレバ、重々^{デウデウ}貴ク思テ、如法ニ修行スル故也。
(卷第三 一〇八頁)

(33) 我見ノ中ニモ、天然トシテ涅槃ヲ欣求スル心有之。

(巻第九 二八二頁)

例(32) (33)における「欣慕」「欣求」は、仏教に関わる名詞用法である。

次に、「望」の用法を見る。本書に「望」は一三例あり、そのうち連用形名詞法が三例、実動詞用法が六例、熟語名詞形式の「所望」が二例、名詞用法「懇望」が一例見られる。

(34) 我が願既ニ満ジ、衆ノ望亦タ足ト思フバカリ也。

(巻第八 二六二頁)

(35) マシテ菩提心ノ行業決定シテ、二世ノ望ミ可ニ成就。

(巻第九 二八四頁)

例(34) (35)における「望ミ」はいずれも「希望」の意を表す名詞用法である。

(36) 實教猶自證ノ眞空冥寂ノ處ニ望レバ妄語也。

(巻第二 八五頁)

(37) 賢人ノ望ム事ナケレドモ、官位ニ処スルガ如ク、水ノ多ケレバ、人
不レ遣トモ海ニ入ルガ如シ。

(巻第七 一三七頁)

例(36) (37)における「望ム」は、動作行為を表す実動詞用法である。

(38) 懇望スル間、無レ止シテ書テアタフ。

(巻第五 一八〇頁)

(39) 僧ノ云「法衆多シ。ナドトリワキ、錫杖ヲ所望スル」ト。

(巻第六 二〇六頁)

例(38) (39)における「懇望ス」「所望ス」は、サ変動詞の形で実動詞用法である。

次に、「祈」の用法を見る。本書に「祈」は一七例あり、そのうち実動詞用法「祈ル」が四例、熟語名詞形式の「祈念」が七例、「祈請」が三例、「祈祷」が二例、「祈雨」が一例見られる。

(40) 「地藏ノ所ニシテ、一食ノ頃所求ヲ祈ベシ」ト説キ給フ事、

(巻第六 一九〇頁)

(41) コレ佛ノ本誓ヲ驚シテ、我願ヲ成セント祈ル言也。

(巻第七 二四〇頁)

例(40) (41)は実動詞用法である。

(42) 咒願ハ事ニヨリテ定レル言ナシ。唯志ヲノベテ祈念ス。

(巻第五 一七九頁)

(43) 本尊ニ丁寧ニ、御祈念アリケル。

(巻第十 二九九頁)

(44) 多年靈寺靈社ニ参詣シテ、祈請スルニ、都テ其ノカヒナシ。

(巻第六 二〇〇頁)

(45) イブカシク思ケレバ、参籠シテ、此ノ事ヲ取別、祈請シケルニ、

(巻第十 三〇八頁)

(46) 天竺^{テンシク}ノ作法、在家人始^メテ作^ル家若^{カニ}ハ喜^{ヨシ}ビ有リ憂モアレバ、為^ニ祈禱^{キタウ}必^ズズ請^ム僧^{ソウ}習^ツト云ヘリ。
(巻第五 一八〇頁)

(47) サレバ現世ノ祈禱^{キタウ}、後生ノ資糧^{シリヤウ}、此ノ經ニ足レリ。

(巻第七 二二二頁)

例(42)～(47)は熟語用法の例である。例(42)における「祈念ス」はサ変動詞用法、例(43)における「祈念」は名詞用法と区別され、例(44)～(45)における「祈請ス」「祈請シ」はサ変動詞用法、例(46)～(47)における「祈禱」は名詞用法である。

次に、「乞」の用法を見る。本書に「乞」は二〇例あり、そのうち実動詞用法の「乞フ」が一二例、名詞「乞食」が七例、名詞「乞者」が一例見られる。

(48) 又王宮ニ米^{コメ}ヲ乞^{コト}テ與^{アタ}ヘテ、十二因縁^{イシエン}ノ章句^{シヤウク}ヲ説キ、宝勝^{ホウショウ}如来^{ミヤウガウ}ノ名号ヲ唱^{トナ}テ、魚^{イサ}ニ聞^キシム。
(巻第六 二〇七頁)

(49) 願^{ネガ}ニシタガヒテ、乞^{コト}ヒ願^{ネガ}フ国、人天・淨土ニ生ズベシ。

(巻第七 二二七頁)

例(48)は音便あるいは誤写として「米を求めて」の意、例(49)は「生まれた国」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

(50) 佛法ニハ乞^{コト}食^シ頭陀^{トダ}上行^{コウギョウ}也。
(巻第三 一一三頁)

(51) 日本ノ乞^{コト}者^{モノ}法師^{ホウシ}ハ、誑惑^{コウガク}ヲモテ道^{ミチ}トシテ、渡世^{トセ}シ侍^{マツル}ル。

(巻第九 二九一頁)

雑談集における希望表現について

例(50)～(51)における「乞食」「乞者」はいずれも名詞の熟語用法である。

次に、「請」の用法を見る。本書に希望表現と認められるのは前出の名詞形式の「祈請」以外に、二例の「請」が見られる。

(52) 此ノ物語、同法ノ請^{コト}ニヨリテ書キ始^ハメ侍^{マツル}ベリ。

(巻第五 一八九頁)

(53) 随喜功德 請^{コト}「転法輪」
(巻第七 二二九頁)

例(52)は「同法の要請によって書き始めた。」の意と解され、名詞用法である。例(53)は漢文の用例であり、「転法輪を請く」と訓読でき、実動詞用法である。

次に、「求」の用法を見る。本書に「求」は二四例あり、そのうち実動詞用法「求ム」が一七例、それ以外は仏教用語としての「欣求」「求不得」「求聞持」「随求陀羅尼經」といった名詞用法である。

(54) 或ハ炎天ノ夏ノ日ニ、汗ヲノゴテ、利養ヲ求^{モト}ム。

(巻第四 一四五頁)

(55) 釈迦大師ノ因位ニ、大施^{ダイセ}太子^{タウシ}トテ、如意珠ヲ求^{モト}メテ、貝ヲモテ大海ヲ酌^{シヤク}ホサムト誓願^{セイガン}シ給^{タマフ}フニ、
(巻第七 二三五頁)

例(54)～(55)は「利養を求める。」「如意宝珠を求めるために、」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

次に、「誑」の用法を見る。本書に「誑」は二例見られる。

(56)「嚴恭ノ詔テ、ヲハスル、錢五万、請取給」トテ、

(卷第九 二八九頁)

(57)「我詔タル事ナシ。但龜ヲ買テ放タル事アリ」ト答フ。

(卷第九 二八九頁)

例(56) (57)における「詔テ」「詔タル」は「嚴恭(人名)が依頼する」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

4、「ホシ」「マホシ」「タシ」「バヤ」「テシカナ」の用法

まず、「ホシ」の用法を見る。本書に形容詞「ホシ」は六例あり、そのうち派生語の「ホシサ」が一例、「ホシガル」が一例見られる。

(58)コトハリハ、サルベケレドモ、ホシカラズ 野老ノニガク、人ノワロキハ

(卷第四 一五一頁)

例(58)は和歌における用例であり、未然形で「欲しくない。」の意と解され、否定的に「願望」を「説明」する用法である。

(59)世間ノ人、カリナル夢ノ中ノ財宝ハ、マコトニホシク思アヒテ日夜ニイトナミ、タヅネアヘリ。

(卷第九 二二八頁)

例(59)は連用形で「手に入れたく」の意と解され、これも「願望」を「説明」する用法である。

(60)常ニ菓子等ノ物、酒ナドモアル時ハ、「物ホシキ者多カルラム。物ニムケヨ」トテ、

(卷第六 二〇五頁)

例(60)は会話文における用例であり、連体形で「物がほしい者は数多いだろう。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(61)心ヲドリテ、鷹ノ子ノホシサニ、

(卷第九 二九二頁)

例(61)における「ホシサ」は「ホシ」に接尾語「サ」を付けた名詞の派生語であり、「鷹の子がほしくて、」の意と解され、名詞用法である。

(62)ソラ事ヲ申テ、ホシガラセ、マイラセムレウニ、スコシヅ、殊勝ノ物ドモヲ、マイラセラレタリケレバ、

(卷第三 一〇八頁)

例(62)における「ホシガラセ」は「ホシ」に接尾語「ガル」を付けた派生語の用例であり、「お召し上がたく、」の意と解され、内心の「願望」が外に現れている動作行為を表す、動詞的用法である。

次に、「タシ」の用法を見る。本書に「タシ」は二四例見られる。

(63)「我モヲガミ奉タシ。ヲホヂハ只ネ給ヘ」トテ、

(卷第六 一九四頁)

(64)サビシキ時ハ目ヲサマシタク、人中ヘサシ出タシ。

(卷第四 一三四頁)

例(63) (64)は「タシ」の終止形の用例である。例(63)は会話文における用例であり、「私も拝みさしあげたい。」の意と解され、一人称の「願望」を「表出」する用法である。例(64)は地の文における用例であり、「外出したい。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(65) 然^{しか}ドモ本来、法ヲ秘スル心ナク侍マ、ニ、老後ニ同法ニヲシヘタク存ジテ記セリ。
(巻第十 三〇五頁)

(66) 小法師コレヲ知テ、事ノ次ニ云ヒタク思テ、鶏ノ曉^{アツキナク}鳴ヲ、
(巻第二 八九頁)

(67) チト物マイリタガリケル時、纔^{ハツカ}ニチリバカリヲ、「ツクリイダシ候」ト、
(巻第三 一〇八頁)

例(65)(66)(67)は「タシ」の連用形の用例である。例(65)は「教えたく思つて」の意と解され、一人称の「願望」を「表出」する用法である。例(66)は「言いたく思つて、」の意と解され、三人称の「願望」を「説明」する用法である。例(67)は「お召しあがりたくお思いになった時に、」の意と解され、三人称の「願望」を「説明」する用法である。

(68) 道心ハ、梯^{ハシ}ヲ立^{タテ}テモヲヨバヌニ、天^{テン}須^{シン}菩^ブ提^{タイ}ノ跡^{アト}ゾマネタキ
(巻第三 一〇一頁)

(69) 制シテ「ナミソ」ト云バ、自ラ學シタキ事モ有ルベキカ。
(巻第三 一〇七頁)

(70) 「我モカクアリタキ」トテ、佛法ヲ信ジ行ゼザル者ハ、メシツカハ
レズ。
(巻第三 一一八頁)

例(68)(69)(70)は「タシ」の連体形の用例である。例(68)は和歌における用例であり、係り結び「ゾ」タキの文型で「まねたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。例(69)は「学びたい事もあるだろうか。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。例(70)は

会話文における用例であり、「私も女院のようにになりたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

次に、「バヤ」の用法を見る。本書に「バヤ」は三例見られる。

(71) 地獄ノ苦ニモ代^{カハ}ラバヤト思ヒ、貧^{ヒン}賤^{セン}・孤^コ独^{ドク}ノ者ニ、財^{アイ}宝^{ブツ}與^ユヘバヤト思フ。
(巻第四 一三〇頁)

(72) 反^{カヘ}テ思ヘバ、人ヲ損^{ソン}ジ害^{ガイ}セバヤト思フ心、彼^{カレ}ガマコトニ苦ヲウクル事ナケレドモ、我^{ワガ}心スデニ、罪^{ザイ}業^{ゴウ}ヲ薰^{クシ}ズ。
(巻第四 一三二頁)

例(71)(72)はいずれも地の文における用例であり、「バヤ」で言い切らず、「バヤト思フ」の形で「地獄の苦にも代わりたいたい」と思ひ、「財宝を与えたいと思う。」「人を傷つけたいと思う心は」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

次に、終助詞「テシガナ」の用法を見る。本書に「テシガナ」は一例見られる。

(73) アヤマリニ、影^{カゲ}ヲ我^ガゾト、思^{オモ}ナシテ、マコトノ心、ワスレテシカナ
(巻第四 一五〇頁)

例(73)は和歌における用例であり、「忘れてほしい。」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。

四、おわりに

以上、雑談集における希望表現の構成と用法を考察してきた。本書を

通説のように、沙石集と同一人の著作とすれば、両書の間には、希望表現においても、創作年代の差及び著作目的あるいは読み手意識の相違と考えられることがいえる。

本書には沙石集と比較して、仮名書きが目立ち、内容的にも庶民の世界を描いた説話が多い。内容及び全体の分量と関連して、沙石集に比して、本書における希望表現の構成形式の種類が多様に亘るが、その用例数の分布に大きな差が認められる。特に名詞「願」との用法と地の文における希望の助動詞「タシ」の多用が本書における希望表現構成の特徴といえよう。

各構成形式の用法についていえば、名詞「願」は仏教用語を表し、人々一般の「ねがい」は動詞連用形名詞法の「願ヒ」で表す傾向がこれまでの考察と一致する。

本書においても、慣用形式「ムトオモフ」「ネガハクハ」及び希望を表す和語の形容詞、助動詞、終助詞が希望表現の中核である。

【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第1部第109号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の間接的・質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「二人称〜てほしいか」「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」などの形式は、「説

明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大事典』第三卷 一九八四年四月第一刷発行 岩波書店

(4) 注(2) 参照。

(5) 注(2) 参照。

(6) 注(2) 参照。

(7) 注(2) 参照。

※貴重な文献に許可くださった香川大学図書館に感謝いたします。

(しばたしように 香川大学名誉教授)

(れんちゅうゆう 広島市立大学客員研究員)

(二〇一八年一月三〇日受理)